

— 大学受験 —

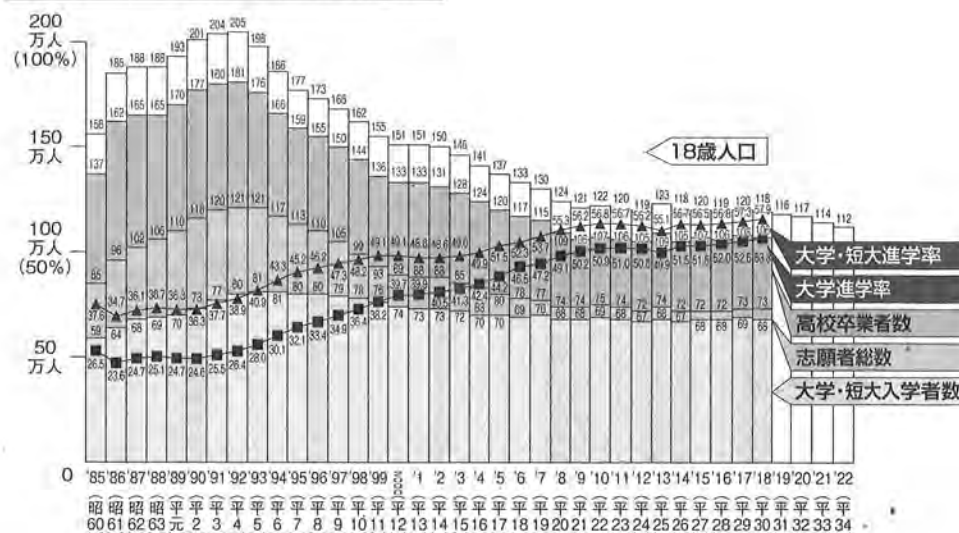
入門講座

大学入試は  
こうして行われる!



今の大学は、お父さんやお母さんが受験した30年前とはまったく違います。時代の移り変わりと同じで、大学も“象牙の塔”と呼ばれるままではありません。大学を取り巻く環境、入試制度、人気学部、就職状況、学費など、大きく変わっています。まさに隔世の感とっていいでしょう。大学入試の現状はどうなっているのでしょうか。この講座で知識を深め、入試についてじっくり考えてみましょう。

【表1】18歳人口と受験生数の推移



【表2】この5年の私立大の定員充足率

	2014	2015	2016	2017	2018
満たしている大学数	313	329	320	352	372
充足率80～100%未満	143	136	140	139	145
充足率50～80%未満	107	101	104	82	54
充足率30～50%未満	13	12	12	8	8
充足率30%未満	2	1	1	0	3
計	578	579	577	581	582

います。逆に短大入学者は減っています。この間、18歳人口は42.5%減っていますから、4年制大学への入りやすさが浮き彫りになってきています。

このように、受験生は減り、大学入学者は増えていとなると、各大学にとって定員確保が厳しいこととなります。その結果、定員割れの大学も多くなります。表2を見てください。これは日本私立学校振興・共済事業団調べのこの5年の定員割れ状況ですが、定員割れの私立大の割合は14年から18年まで45.8→43.2→44.5→39.4→36.1%と推移しています。

定員割れ校数は、景気の状況や、18歳人口の増減の影響を受けて変動しています。リーマン・ショックによる不況が改善されたここ数年は、主に18歳人口の増減によ

り、定員割れ校の増加と減少を繰り返しています。

とはいえかつての不況の影響は色濃く、大学入試の志望校の選び方にも大きな影響を与えています。その第一が大学進学にかかる経費の削減です。なるべく安上がりで大学に進学してほしいと考える保護者が多いのです。その結果が国立大人気の高さに表れています。近年は確実に合格できる大学を目指す「安全志向」、浪人を選べる「現役志向」、自宅から大学に通う「地元志向」が高まっています。

国立大の一般入試はセンター試験の受験が不可欠です。19年のセンター試験には57万6830人が志願しました(表3参照)。昨年より5841人(1.0%)減っています。今年度は、平均点が文系・理系ともにアップし、特に文系は

大学・短大全入時代到来が明らかに

「大学・短大全入時代が到来する」のは、もはや時間の問題です。全入時代とは、「大学・短大の入学生定員≧大学・短大志願者」になることです。つまり、大学・短大入学希望者が、進学先を考慮しなければ、全員が必ずどこかの大学・短大に入学できることを意味しています。日本中を探せば、必ず入れる大学・短大があるという意味です。

しかし、全入のような状況は、現実には起こりえません。東京大、早稲田大などの人気大学や医師になるための医学部医学科に、浪人しても進学したい受験生はたくさんいるからです。

浪人生が生まれた分、定員が埋まらない大学・短大が出てくることになります。その割合が高い学校では、淘汰されることに結びつきます。

こうなった大きな理由が少子化です。表1を見てください。受験生数が増ったのは1992年です。その後、18歳人口は減少の一途をたどっています。

92年当時の受験生数は、約121.5万人で、入学者数が79.6万人。受験生の3人に1人、42万人近くが、大学・短大に入学を希望しながら入学できなかったことになりました。大変な激戦り入試でした。

それが2018年には、受験生数が約73.0万人で、1992年の入学者より少なくなっています。一方、入学者数は約

68.3万人で、進学を希望しながら入学できなかった人はわずか4.7万人です。大学・短大に進学を希望しながら入学できなかった人は、およそ16人に1人と激減しているのです。

以前に比べ、大学に入りやすくなっている

受験生数減もさることながら、大学数が増えていることも全入時代到来に拍車をかけています。4年制大学は1992年の523校から2018年は782校へ259校、約1.5倍に増えました。新設大学だけではなく、既設の大学でも学部新設のラッシュが続く、受け皿は広がっているのです。特に4年制大学の入学者を1992年と2018年とで比べますと、およそ54.2万人から62.9万人に16.1%増えて

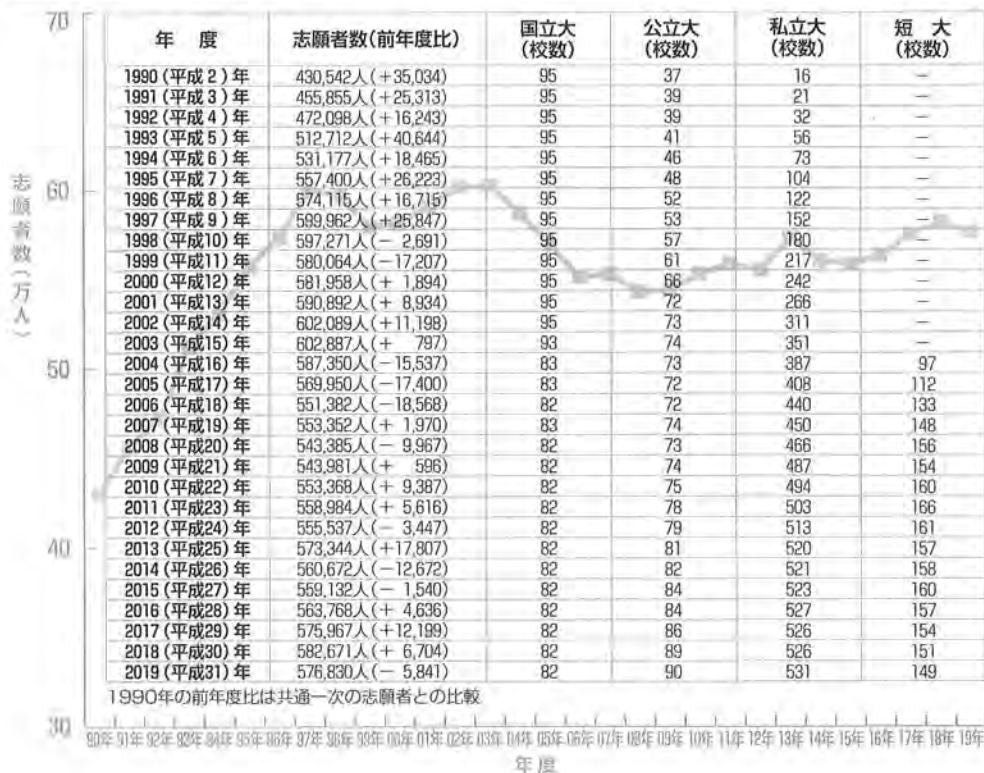
19 入試トピックス①

▶センター試験

19年のセンター試験志願者は昨年より1.0%減り、4年ぶりの減少となりました。これは、現役生が9千人ほど減ったことが影響しています。ここ数年、大規模私立大を中心に入学者の定員超過率の抑制が進み、合格者が大幅に絞り込まれて一般入試が難化したことから、推薦入試やAO入試にシフトする現役生が増えているためと見られます。

来年は1月18日、19日に実施されます。

【表3】センター試験志願者数の推移



大きく上がりました。かつては、センター試験の平均点がアップすると、国公立大の志願者が増え私立大の志願者が減り、逆にセンター試験が難化し平均点がダウンすると、受験生は弱気になって国公立大志願者が減り、私立大志願者が増える傾向にありました。センター試験が難しいことは受験生全員に共通のことなのですが、どうしてもこのような状況が毎年繰り返されてきたのです。

ただ、近年はこうした傾向が影を潜めています。国公立大の志願者は、センター試験の平均点に関係なく連続で減少してきました。19年は8年ぶりに増加に転じましたが、国立大だけの集計では減少が続いています。国公立大人気は高いのですが、難関大学を中心に後期の縮小もしくは廃止が進んでいるため、出願したくてもできない状況にあるからです。さらに、現行の教育課程になって、国立大のセンター試験のハードルが高くなった影響もあります。理系の受験生は専門理科を2科目受ける必要があり、数学も学ぶ範囲が広がりました。そのため私

立大に志望変更する受験生が増えているのです。

一方、私立大はセンター試験の平均点に関係なく、近年、志願者が増え続けています。これは、国立大からの志望変更に加え、入試方式の多様化や受験料割引、ネット出願の普及などにより、出願しやすくなったためです。さらに、16年から大規模大学を中心に、入学者が募集定

### 19 入試トピックス②

#### ▶私立大入試

16年度入試から、文部科学省が大規模大学の入学定員に対する入学者の超過率を厳格化させているため、私立大では合格者の絞り込みが進み、試験は難化しています。近年は景気の回復とともに、難関大にチャレンジする受験生が増加傾向にありましたが、この難化の影響で、一般入試では再び安全志向が広がってきています。難関大の早稲田大、慶應義塾大は、19年はそろって志願者減となりました。

員を超える割合が厳しく制限されたため、合格者が減っています。志願者が増えているところに合格者が減少しているため、私立大入試が難化しているのです。そのため、受験回数を増やそうと、大半は出願するだけで合否が決まるセンター利用入試に出願する受験生が増えています。センター利用入試は一般方式よりハードルが高くなります。そのため、合格校を確保するために、自分の学力で確実に受かる大学に出願するケースが多くあります。現在の大学入試において、センター試験は大きな影響力を持っているのです。

#### ■大学の二極化進み、志望校選びが難しい時代へ

ここ数年、私立大の志願者は増加傾向ですが、大学に入りやすい状況は変わっていません。志願者が集まる大学と集まらない大学で、「大学の二極化」が進んでいます。どうということかといえますと、やがて、大学は「入試を実施しても全員合格に近い場合、試験を実施する意味があまりない大学」と、「厳しい入試が展開される難関大学」との二極に分かれていくということです。

このような状況になってきますと、志望校選びが難しくなります。学力を測る尺度である偏差値が、全入の大学では役に立たなくなります。およそ4割の私立大で定員割れが起きているわけですから、進学しようと思えばどこかの大学に進学することが可能です。それが進みたい大学であれば、ということないわけですが、なかなかそううまくいきません。難関大の入試は厳しいままだからです。

大学の選び方は大きく分けて3通りあります。ひとつは大学で学びたいことが決まっていて、それを実現できる大学を選ぶという方法です。その分野で学べば、大学卒業後の進路まで考える余裕があり、目標が早く定まります。もっともオーソドックスな大学選びの方法です。

一方、行きたい大学が決まっている場合もあります。どうしても〇〇大学に行きたい場合は、学力と相談しながら、その大学で自分が学びたい分野を探し、受験する学部を決めていくことになります。特に文系でよく見られる方法です。

最後は前記のどちらでもないという時の選び方です。これは様々な視点から選んでいくことになります。この場合、学力で合格できそうな大学を選びがちになりますが、これはあまり感心しません。

その前に自分なりに絞っていくことが必要です。高校で既に文系か理系かは選んでいるはずですが、さらに、自分に向かいかどうかそれぞれの学部で何を学ぶかを知れば(本書157ページからの「大学・学部・学科選び入門」

参照)、わかってくるでしょう。大学選びについても、自宅を離れて進学していいかどうか、親と相談して決めれば絞ることができます。また、学部によって学費の差もあります。表4の学部系統別の平均の学費を参考にしてください。ぼんやりとでもいいから、進学したい学部、大学を決めていくことが大切です。

#### ■どのような方法で大学に入学していくか

大学の二極化が進んできると、どのルートで大学に入学するかも重要になってきます。その中で人気を集めているのが推薦・AO入試です。

表5を見てください。これを見ますと、一般入試での入学者が、国立大では84.5%、公立大では73.0%と高率ですが、私立大では08年に初めて5割を切り、17年は48.6%になりました。私立大では一般入試より推薦やAO入試などで入学する学生の方が増えて、昨年も5割を超えています。それだけ、私立大では、入試における推薦やAO入試の比重がアップしているわけです。

推薦入試は高等学校長の推薦を受けて出願しますが、多くの場合、出願に際して高校在学中の成績基準が設けられています。評定平均値が4.0以上というようにです。これは高校1年、2年と3年の1学期までの成績を平均した値です。これが一定のレベル以上であることが必要なのです。さらに、学業成績だけでなく、課外活動を評価する推薦入試も多くなっています。

私立大の推薦入試では、大きく分けて指定校制と公募制の二種類があります。

指定校制推薦では、応募できる高校が大学によってあらかじめ決められています。難関大で多く実施され、面接や小論文などの試験がありますが、出願すればほとんどの場合、合格になります。ただ、各高校から応募できる人数が1人など募集枠が小さく、高校内での選考を通過できるかどうか重要になってきます。

一方の公募制推薦は高等学校長の推薦を受けることは同じですが、成績基準を満たしていれば、どこの高校からでも出願できるのが特徴です。一般入試に比べて小論文、面接が中心のため科目負担が軽く、関西の大学などでは学力試験を課しますが、一般入試より科目数が少ないところが多くなっています。また、推薦入試では合格＝入学が原則ですが、関西の大学などでは、他大学との併願を認め、合格後に入学する大学を決められる一般入試のような推薦入試も多くなっているのが特徴です。

これ以外にも、スポーツの成績を重視したスポーツ推薦、学校長ではなく自分で自分を推薦する自己推薦などがあり、方式もバラエティに富んでいます。

【表4】2018年春の学部系統別学費の平均

設置	学部系統	入学金平均	授業料平均	初年度平均
国立大	全学部 (標準額)	282,000	535,800	817,800
	全学部 (地域内)	230,347	538,633	770,016
公立大	全学部 (地域外)	393,618	538,633	933,537
	医	1,329,032	2,691,774	7,383,757
私立大	歯	600,000	3,207,647	5,468,765
	薬	324,722	1,402,864	2,179,495
	看護	276,678	1,031,023	1,832,688
	社会科学	230,080	749,653	1,253,026
	人文科学	233,579	788,141	1,314,282
	理工	236,392	1,060,824	1,633,829

単位：円 ※二部・夜間は除く

【表5】2017年の入試種別入学者数の割合 (%)

大学	一般入試	前年比	推薦入試	前年比	AO入試	前年比
国立	84.5	(-0.5)	12.2	(±0.0)	3.3	(+0.5)
公立	73.0	(-0.2)	24.6	(±0.0)	2.4	(+0.2)
私立	48.6	(-0.5)	40.7	(+0.4)	10.7	(+0.1)
計	55.6	(-0.6)	35.3	(+0.4)	9.1	(+0.2)

AO入試は93年まで1校しか実施していませんでした。90年に慶應義塾大が始めた方式です。それが近年、実施校が急増し、17年は国公立大あわせて554校が実施しました。2001年以降増えており、まさに「21世紀型の選抜」といっていいでしょう。AOとはアドミッションズ・オフィスの略で、アメリカの大学で行われている一般的な選抜方式です。

AO入試は入学を希望する受験生と大学が面接を通して、お互いに納得して入学する、させるという方式です。推薦入試での高等学校長の推薦や出願の基準である高校在学中の成績基準などは設けられていないのが普通です。ただ、高校でのクラブ活動、ボランティアなどの社会活動の取り組みなどが求められます。自己推薦に似ていますが、入試の中心は複数回実施する面接です。なかには小論文や学科試験を課す大学もあります。

面接では「高校時代、何をしてきたか」「この大学・学部を選んだ理由は」「大学に入学したら、何をしたいか」などを聞かれるのが一般的です。自分をさらけ出す選抜になるため、自分をどうアピールできるかが合否の分かれ目になります。

ただ、推薦やAOの選抜では科目負担が軽いため、学

生の学力低下の一因との指摘があります。そのため、調査書の提出を求めたり、国公立大ではセンター試験の成績が必要な大学が増えています。

16年には東京大が推薦入試を、京都大が推薦・AO入試などで選抜する特色入試を、それぞれ初めて実施して大きな話題になりました。学力試験だけでは計れない、卓越した能力を持つ多様な生徒を獲得するのがねらいです。さらに17年は大阪大が後期日程を廃止して「世界適塾入試」という推薦・AO入試を導入して注目を集めました。東北大では昨年、医学部保健学科、薬学部、工学

### 19 入試トピックス③

#### ▶国公立大入試

19年のセンター試験の平均点は、文系・理系ともに平均点がアップ、特に文系の上がり幅が大きかったようです。これにより人文・社会系の志願倍率（志願者数÷募集人員）は前年の4.9倍から5.1倍に上がりました。理工系は4.4倍、農・水産系は4.1倍で前年と変わりませんでした。受験生の安全志向と地元志向が根強く、公立大の志願者が増えている一方、国立大の志願者は減少を続けています。

部、農学部で一般入試の募集人員を減らし、AO入試を増員しましたが、19年入試では文学部、法学部、理学部、医学部医学科でも同様の改革を行いました。私立大だけでなく国立大でも推薦入試やAO入試の比重が高まってきています。

一般入試は国公立大と私立大では大きく異なります。国立大の入試では、同じ大学で前期と後期2回入試を行うのが一般的です。多くは前期のほうが募集人員が多く、後期は少なくなっています。前期で合格し入学手続きをとると、後期を受験しても合否判定から除外されず、19年で見ますと前期は2月25日から始まり、合格発表は3月10日までに終わります。後期は3月12日から入試が始まります。前期の入学手続き締切日は3月15日です。

出願は1月22日～1月31日までに統一されており、前期の結果を見てから後期に出願することはできません。後期は前期の敗者復活戦の入試になり、最初の出願時には大変な倍率になりますが、実際の受験者数は少なくなることが多く、学部・学科によっては競争率が1倍台のところも出てきます。最後まで諦めないで粘ることが大切です。さらに、最近では後期を廃止する大学も増えています。東京大は前期のみになりましたし、学部や学科によって前期をやめる大学も増えています。そうなりますと、その大学を受験するチャンスは1回だけとなるわけです。

一方、公立大は国立大と同じ入試システムですが、前後期の他に中期を設けています。これは3月8日から始まる入試で、大学によって中期を実施する大学と実施しない大学があります。

国公立大の合否判定はセンター試験の成績と、大学で行う独自の2次試験の得点の合計で行われるのが一般的です。しかもセンター試験の重みが高い大学、学部のほうが多く、センター試験の出来、不出来が合否を左右する場面が多くなっています。

ただ、国立大でも難関大では大学独自の試験の重みのほうが高くなっています。東京大ではセンター試験110点満点に対して2次が440点満点の計550点で合否判定します。例えば、東京大・文科I類の18年の合格最低点は354.9778点です。英語のリスニング（50点満点）を除いた900点満点のセンター試験の成績を110点に圧縮するため、端数が出てくるわけです。センター試験の問題の配点が2点の場合、これを落とすか正解するかで0.2444点変わりますから、この差で不合格になる場合も出てくるわけです。

また、東京大は学科類で実施しますが、その他の大学でも学部ごとにセンター試験の成績で2段階選抜を行うケースがあります。2次試験の受験者を募集人員の5倍な



どに制限している大学があり、センター試験の成績だけで門前払いにされてしまうことがあります。

前述の通り、私立大は同じ大学、同じ学部でも複数回入試が行われており、何度受けてもかまいません。複数の合格校の中から、入学する大学・学部を決められます。

私立大では近年、入試の多様化が進みました。受験生を多角的に評価しようという狙いで、数多くの方式が実施されるようになってきています。「地方試験」を実施する大学が多くあります。これは大学所在地と異なる地方に試験場を設け、わざわざ大学まで受験に行かなくてもいいようにするものです。

これ以外にも「試験日自由選択制」があります。これは例えば、3日間同じ学部で試験を実施し、他大学との併願のことを考え、都合のよい日に受験すればいいようにしたものです。どうしてもそこに入りたければ、3日間連続して受けてもいい大学もあります。合格発表は1回で、偏差値法を使って判定し、問題の難易で差がつかないように工夫されています。また、センター試験の成績だけで合否が決まる「センター利用入試」やセンター試験の成績と大学での試験の成績を合計して合否判定する「センター併用方式」などもあります。

さらに最近増えているのが、「全学部統一日程試験」

です。同志社大、立教大、明治大、法政大、青山学院大など多くの大学で実施されています。これまで学部ごとに行われていた入試を、1日で全学部(文系全学部のみなどの場合もある)が入試を実施するというような方式のことで。今まで難関大では受験機会が少なかったのですが、これにより受験機会が増え、人気を集めています。また、英語の外部試験を利用した入試も増えています。15年に上智大がTEAP(アカデミック英語能力判定試験)利用入試という英語の外部試験を利用した全学部型の入試を実施して志願者を増やしました。16年には東京理科大学、青山学院大、立教大、法政大、立命館大、関西学院大などが、17年には早稲田大や中央大、明治大などが同様の入試を実施するなど、急速に広がっています。

多様化しているのは入試だけではなく。キャンパスの新設や移転なども積極的に行われています。

首都圏では、17年に東洋大が東京・北区に赤羽台キャンパスを新設し、情報連携学部、国際学部、国際観光学部を新設しました。また19年は、桜美林大が東京・新宿区に新宿キャンパスを開設し、町田キャンパスからビジネスマネジメント学群などを移転しました。

西日本では、17年に大阪工業大が大阪都心の大阪市北区に梅田キャンパスを開設し、ロボティクス&デザイン工学部を新設しました。18年には常葉大が、静岡市に学生数4000人規模の静岡草薙キャンパスを新設し、静岡瀬名キャンパスの教育学部と外国語学部、富士キャンパスの経営学部、社会環境学部、保育学部などを一斉に移転するという大規模な再配置を行いました。

いずれも利便性の高い場所にキャンパスを新設し、教育資源を集中させることで、学生の学びやすさや、学部間の連携の向上を図っています。

このような学部・学科の移転、都心キャンパスの新設など、ダイナミックな大学改革は今後も続くと考えられます。

## ■ 学費が不安でも奨学金制度充実

大学に合格したら、当然納めなければいけないのが学費です。入学金や授業料の額も大きく様変わりしています。

表4の学費の表を見てください。社会科学系(法学や経済学などを学ぶ系統)の初年度納入金の平均額は約125万円で、理工系は約163万円。両系統ともに30年前との比較では3倍以上値上がりしています。国立大の学費の上昇幅は、私立大以上です。この30年で5.6倍(14万6000円→81万7800円)に跳ね上がっているのです。また、初年度納付金が平均で約738万円かかる私立大医学部。一般家庭には負担が大きい額ですが、学費を値下げする

大学が相次いでいます。

その一方で、大学の奨学金制度が充実してきています。卒業後に返還義務がある貸与型はもちろん、親の所得とは無関係に入試の成績上位者や在学生の成績上位者に給付(返還義務がない)する奨学金制度が数多く設けられています。

給付奨学金のさががけは神奈川大。12月に行われる給費生試験に合格すれば、入学金を除く初年度納入金を免除し、文系学部で年額100万円、理工系学部で年額130万円が支給されます。さらに自宅外通学者は年額70万円の生活援助金が給付されます。

最近では奨学金の予約制度も始まっています。合格しないことには、奨学金制度が利用できるかどうか分からないケースがあります。入試連動型だと、かなりの好成績をとって上位に入らないと奨学金をもらえません。そこで、合格したら利用できる予約型の制度が実施されるようになってきました。早稲田大の「めざせ! 都の西北奨学金」は、首都圏以外の受験生1200人を対象に、春期授業料を4年間支給するもので、入試前にこの制度で奨学金を予約し合格すると支給されるというものです。このような予約型奨学金制度は首都圏では慶應義塾大、青山学院大、立教大、中央大、法政大などでも実施されています。西日本でも愛知大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大など多くの大学で行われています。国立大でも東京大、お茶の水女子大や電気通信大でも同様の制度を設けています。

大学に合格しても経済的な面から進学を諦めないよう、受験を決めたら、あるいは合格したら大学に相談してみることをお勧めします。

## ■ キャリアサポートに力を入れる就職支援

就職活動(就活)について知っていますか。高校生が大学に入学するために受験勉強をするのと同じように、大学生は就職するための就活を行います。就職は大学入試より厳しく、100社受けて1社に採用されることなど、珍しいことではありません。人気企業になれば、7万人が応募し1000人採用など当たり前のことです。倍率は70倍にもなり、大学入試の比ではありません。そのため、大学の支援が大切になってきます。大学では早い学年から、就職するには何が必要かを考えさせるキャリアサポートの授業を行っています。

就活は3年生の3月から始まります。それまでに企業を訪問し仕事の内容の説明を受けたり、希望する企業の卒業生を訪ね話を聞いたりします。社会には皆さんが知っているよりはるかに多くの企業があり、業績のいい企業



もたくさんあります。また、公務員になりたい、教員になりたいなど、試験がある職種を目指す場合にも、対策講座を開講している大学が多くあります。例えば、青山学院大は就活に力を入れている大学として知られています。その成果は就職率に出ます。青山学院大は首都圏の難関8私立大(青山学院、早稲田、慶應義塾、上智、中央、法政、明治、立教)の中で、2011年から6年連続で実就職率(就職者数÷(卒業者数-大学院進学者数)×100で算出)がトップでした。大学のサポートがこういった就職率に反映されるのです。

## ■ 就職状況で人気学部も様変わり

好調な大学生の就職状況が続いています。文部科学省によると、19年春に卒業を予定している大学生の18年12月1日時点での就職内定率は87.9%でした。1996年の調査開始以来、最低を記録した2010年から毎年上昇を続け、2018年の最終値は98.0%で調査開始以来最高の数値となりましたが、今年はさらに上昇すると見られています。

これを受け、受験生たちの志望校選びも変わってきたようです。

大学通信では毎年、全国の2000進学校の進路指導教諭にアンケート調査を実施しています。昨年は822校から回答がありました。

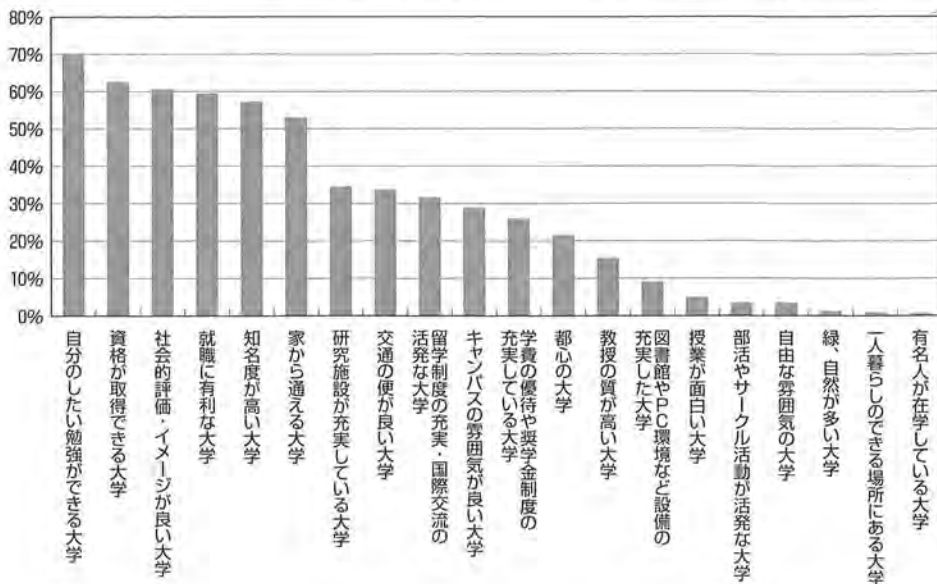
次のページの表8は、その中で「生徒に人気のある大学」について聞いた結果です。トップは「自分のしたい勉強ができる大学」で69.8%、次いで「資格が取得できる大学」で62.6%、「社会的評価・イメージが良い大学」60.6%、「就職に有利な大学」59.5%、「知名度が高い大学」57.3%、「家から通える大学」53.1%の順でした。「就職に有利な大学」は不況期には1位を取るなどベスト3の常連でしたが、ここ数年は4位以下にとどまっています。就職状況の好転により、ブランド志向や有名大学志向が強まり、リーマン・ショックによる不況が到来する前の状況に戻ってきています。逆にその当時と異なるのが、国際系の躍進です。「留学制度の充実・国際交流の活発な大学」は人気を維持、4年連続で10位以内に入ってい

## 19 入試トピックス④

### ▶ 文系学部の動向

文系の志願者は、景気の回復に伴って幅広い就職先のある経済・商・経営などの経済系学部を中心に増えてきましたが、難化の反動で19年は沈静化しました。国立難関大では経済系が減った一方、志願者が減っていた法学部の人気が高まる傾向が見られました。私立大でも文系学部は志願者増で難化が続いていた分、学部系統により志願者が減る傾向が見られました。難関大で志願者減が多く、安全志向が顕著になっています。

【表6】生徒に人気のある大学はどのような大学でしょうか？（複数回答可）



ます。世の中のグローバル化の動きに、受験生の関心が高まっているようです。

この傾向は受験生の学部志望動向にも表れています。表7を見てください。

国際系は2位 (49.2%) で、この4年で1位→1位→2位→2位と、安定した人気を得ています。1位は2年連続で経済系 (64.2%) で、昨年よりさらに9.5ポイントも増えています。3位以降は経営系 (48.0%)、看護 (35.6%)、情報系 (35.1%) と続きます。3位の経営系も毎年上昇を続け、今年も5.2ポイント増えて初めて看護を抜くなど、好調な就職状況を背景にした文系人気の回復が顕著になってきています。不況下で続けてきた「理高文低」が「文高理低」に変化しています。大手予備校の入試分析担当者によれば、この傾向は来年も続きそうで、特に経済、商、経営の社会科学系の志願者が増えそうです。

## 2年後に迫る大学入試改革

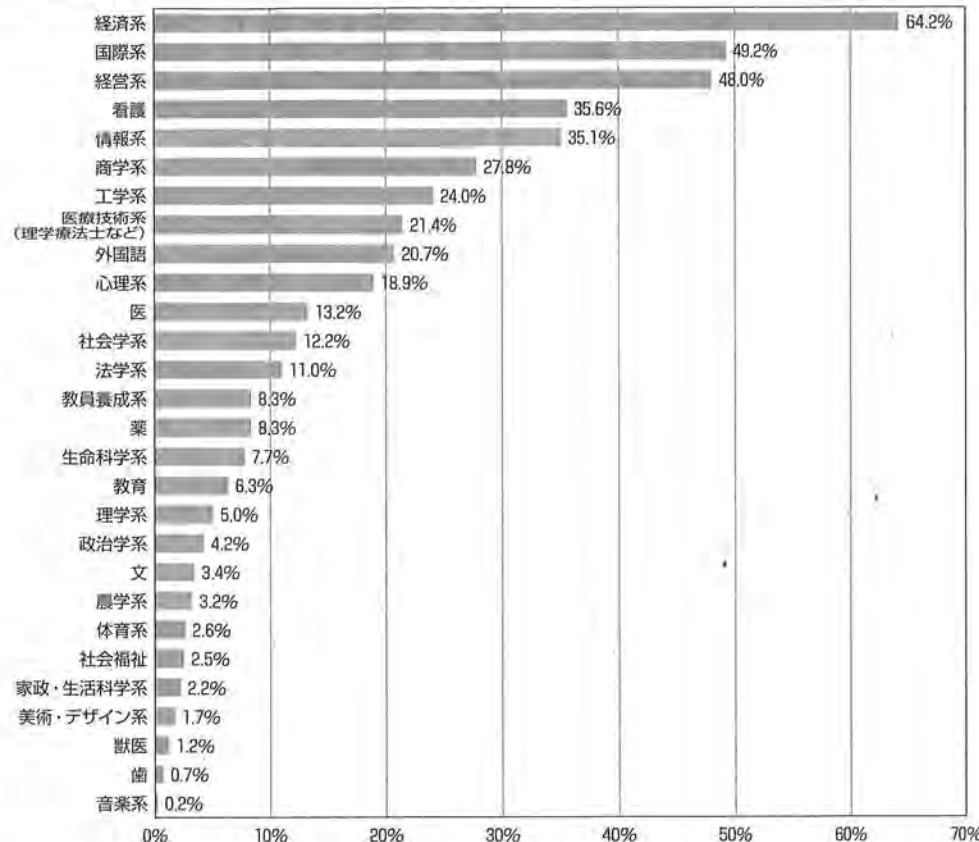
20年度 (21年4月入学者が対象) から、大学入試が大きく変わります。現在はセンター試験が入試において大きな役割を果たしているのはこれまで見てきたとおりですが、21年1月からはセンター試験が廃止され、かわって「大学入学共通テスト」が実施されます。

この入試改革の背景のひとつには、今までの試験が知識、技能に偏った問題が出題されてきたことへの反省があります。そのため日本の子どもたちは、他の国の子どもたちに比べて、答えが一つの問題には強いが、答えがない、あるいは複数ある問題には弱いといわれていて、これを改革していくのも狙いです。グローバル化の進展に加え、IoT、AIなど科学技術の進歩が著しい中、これから子どもたちには、より柔軟で多様な能力が求められることは間違いないでしょう。こうした将来の動きをにらみ、教育を変えていくための第一歩として、入試改革が実施されることになったわけです。

大学入学共通テストは、センター試験と同じ1月中旬に1回限りで実施されます。出題はこれまでのようなマークシート方式の試験だけではなく、数学と国語では記述式の試験も課されるようになります。また、英語の試験では、英語の4技能 (読む、聞く、書く、話す) を重視し、これまでの「読む」「聞く」だけの試験に加えて、新たに「書く」「話す」の試験が行われます。ただし新たな2技能については会場での試験実施が難しいため、英検やTOEFL、TEAP、TOEICなど、民間の外部試験の成績を活用することになっています。

また入試も変わります。推薦・AO入試は学力をしっかりと問うものになり、逆に一般入試は、従来は学力試験

【表7】生徒に人気がある学部・学科系統はどこでしょうか？（複数回答可）



の成績だけで合否が決まっていたのが、高校時代の活動歴なども合否の判断に使うよう求められます。20年度の入試改革にあわせ、推薦入試は「学校推薦型選抜」に、AO入試は「総合型選抜」に、一般入試は「一般選抜」にそれぞれ名称が変わります。

こういった改革が行われるわけですから、今までの学習に加えて、英語の4技能をしっかりと身につけることが求められます。さらに、国語力のアップも必要です。しかも大学入試が多面的評価になるので、高校時代に部活動や学校行事にも積極的に取り組むことが求められます。勉強だけしてればいい、部活動さえしておけばいい、などという考えは捨てたほうがいいでしょう。

改革後の入試を最初に受けるのは現在の高校2年生ですが、もちろん浪人すれば現在の高校3年生も対象にな

ってきます。学校生活の中で、何事にも主体的に取り組むなど、やがて来る新たな入試への対策をしていくことが大切です。

## 19 入試トピックス⑤

### ▶理系学部の動向

文系人気が高まる一方、理系志願者は減少傾向が続いていますが、今年は理学系と工学系は前年並みと見られます。工学系分野の中では、オリンピック需要などの影響で高まっていた建築、土木系の人気も沈静化した一方、AIやIoTなど情報化社会の急速な発展に伴い、情報科学や情報工学の人気もアップしています。そんな中で農学系は私立大を中心に志願者が減少しており、志望者にとっては狙い目になりそうです。